

主 題：御霊の賜物 1

聖書箇所：コリント人への手紙第一 12章1-7節

コリント教会に存在した様々な誤りをパウロはこれまで指摘して矯正して来ました。前回、私たちは「主の晩餐」ということで聖餐式についての彼ら自身の間違いを新たにして、そして、正しい真理へと導いたわけです。今日見ようとしているこの12章には「御霊の賜物」についてのパウロの教えがあります。実際には12章だけでなくその後も続いていきます。コリント教会にあった「御霊の賜物」についての誤りをパウロは矯正しようとするのです。

◎「御霊の賜物」について

12：1「さて、兄弟たち。御霊の賜物についてですが、…」と、新改訳聖書では「御霊の賜物」のところに*が付いていて、下欄に別訳として「霊的な事から」と記されています。というのは、この「霊的な賜物」の「賜物」ということばはギリシャ語の原文には「出て来ません。パウロはここで「御霊について」とそのように記したのです。では、どうして訳者は（英語でもそうですが）「賜物」ということばをここに補足したのでしょうか？実は、「御霊」ということばは「霊的な人」、「霊的な事から」と取ることもできるのです。ですから、訳者は「霊的な事から」と取って「霊的賜物」と訳したのです。ですから、下覧にこのような説明を加えているのです。

少なくとも、パウロがここで教えようとしていることは「御霊」について「聖霊なる神の働き」についてです。これはコリント教会の人たちにとっても、また、私たちにとってもとても大切なことです。なぜなら、この中でパウロが記しているのは、どうすれば私たちは霊的に成長していくのか、どのように私たちは歩んでいくべきなのか、どういう歩みを神は私たちに望んでおられるのかということ、そのことを教えるからです。個人の信仰の成長は個人にとっても祝福ですが、教会にとっても大きな祝福です。ですから、パウロが教える大切なメッセージを今日もごいっしょに見ていきたいと思えます。

◎聖霊の働き

12：1の続きには「…私はあなたがたに、ぜひ次のことを知っていただきたいのです。」とあります。直訳すると「私はあなたがたが無知であってほしくありません。」「私はあなたがたが知らないでいてほしくありません。」とそのようになります。これから話そうとする「御霊」について「聖霊」について「聖霊の働き」について、私が教えることをぜひ知ってもらいたいとそうようにパウロは言うのです。パウロは重要なことを語る時にこのように言います。大変大切なメッセージがここに記されているのです。聖霊なる神の働きを見ていきます。

A. 救いをもたらす 2-3節

1. 救われる前 2節

2節の初めに「ご承知のように、あなたがたが異教徒であったときには、」と記されています。「ご承知のように、」という動詞は完了形です。今はそうではないが、かつての自分を振り返った時、そのときの自分がどのような者であったか、そのことをあなたは知っているでしょう？と言うのです。確かに、私たちもそうです。救いに与る前の自分を振り返るとき、自分はどのように歩んでいたのか、そのことを私たちはしっかり覚えています。パウロは「かつてのあなたがたはこういう者であった。そのことを知っているでしょう？それはあなたがたが異教徒であったということです。」と言うのです。

1) 異教徒だったこと

「異教徒」ということばは「民族、国民、異邦人」と訳せることばですが、ここでは「救いに与っていない人、救われていない人」のことを言うのです。パウロはIテサロニケ2：16で「彼らは、私たちが異邦人の救いのために語るのを妨げ、…」と記しています。すべての人たち、あなたも私も例外なく、かつては異教徒であった、この救いに与っていない者、救いを拒んでいた者であったということです。また、エペソ2：12には「そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。」と記されています。これが私たちだったと言います。何の希望もなく、ただその日その日を暮らし、この先に待ち受ける「死」を恐れながら生きていた。望みもなく神もない者だったのです。

2) 偶像に導かれていた

2節にこう続きます。「どう導かれたとしても、引かれて行った所は、ものを言わない偶像の所でした。」と、この「引かれて行った」ということばに注目してください。この動詞は受け身で書かれています。あなたがたは引かれて行ったのです。だれかがあなたを引いていったのです。このことばは「連れ去る、引き

出す」という意味がありますが、だれかがあなたにそのような働きをしたのです。ということは、あなたがたが救いに与るまでの生活には自由がなかったということです。私たちは何が正しくて何をすべきかという選択の中にいたのではなく、一方的に引かれて行ったのです。罪の奴隷とはそういうことです。罪という主人が私たちを引っ張っていくのです。主のみこころに逆らうようにと引っ張り続けるのです。ですから、救われる前の私たちはまさに自由のない者だったのです。私たちは罪を重ねることしかできませんでした。

どんなところに引かれていったのか、そのことが書かれています。「ものを言わない偶像の所でした。」と。「ものを言わない」、つまり、「口がきけない」ということです。語ることが出来ない者です。だから、人々の願いに答えることができないのです。旧約聖書、詩篇 115 : 5、135 : 16 に同じことが書かれています。「口があっても語れず、目があっても見えない。」と。偽りの神々はまさにそういう存在だと言うのです。ですから、真の神とそうでない神をどのように見分けることができるのか？私たちの祈りを本当に聞くことができるかどうかです。ご自身が望むどんなことも為すことができるかどうかです。皆さん、考えてみてください。あなたの祈りを聞くことが出来ないものに、どれ程熱心に祈ってもそれは虚しいことです。気休めはあったとしてもそこにあなたが求めている答えを見出すことはできません。

旧約聖書に書かれているある出来事を思い出してください。もう皆さんよくご存じのことです。イスラエルは北王国と南王国の二つに分かれていました。そして、北を治めていたのはアハブという王でした。彼は22年間、北王国を治めるのです。第7代目の王でした。この王は彼の妻イゼベルの影響を受けて、サマリヤの町にバアル礼拝のための神殿を建てる許可を与えたり、アシェラ像を造らせることをしました。このバアルもアシェラも、今のイスラエルを思い出していただくと地中海に近いところ、カナンや北のフェニキヤなど、今のシリアの南ですが、その辺りの地域で人々によって信奉されていた偶像でした。どちらも豊穡の女神で、豊かな実りをもたらしてくれると彼らは信じて崇拝していたのですが、そういう偶像のために神殿、像を造るということをしたのがアハブ王でした。

このアハブが王として君臨したときに預言者として活躍したのがエリヤでした。エリヤはおもしろい提案をします。というのは、今話したこのバアルやアシェラという偶像に仕える預言者たちがたくさんいました。全部で850人という数が聖者には書かれています。イスラエルの神に仕えるのはエリヤひとりでした。多くの者たちは迫害を受けるのです。そこでエリヤはこのような提案をします。

2頭の雄牛を持って来て殺してたきぎの上に載せて、火をつけるのではなく、自分たちの神々の名を呼んで天から火をもって答えてくださる方、その方が真の神だと言います。どちらの神が本当の神かと、みなはそれに賛同し2頭の雄牛が連れて来られました。エリヤは「あなたがたのほうが数が多いからあなたがたが先にしなさい。」と言います。1列王記 18 : 22-24 「:22 そこで、エリヤは民に向かって言った。「私ひとりが【主】の預言者として残っている。しかし、バアルの預言者は四百五十人だ。:23 彼らは、私たちのために、二頭の雄牛を用意せよ。彼らは自分たちで一頭の雄牛を選び、それを切り裂き、たきぎの上に載せよ。彼らは火をつけてはならない。私は、もう一頭の雄牛を同じようにして、たきぎの上に載せ、火をつけないでおく。:24 あなたがたは自分たちの神の名を呼べ。私は【主】の名を呼ぼう。そのとき、火をもって答える神、その方が神である。」民はみな答えて、「それがよい」と言った。」

18 : 26 から 「:26 そこで、彼らは与えられた雄牛を取ってそれを整え、朝から真昼までバアルの名を呼んで言った。「バアルよ。私たちに答えてください。」しかし、何の声もなく、答える者もなかった。そこで彼らは、自分たちの造った祭壇のあたりを、踊り回った。:27 真屋になると、エリヤは彼らをあざけて言った。「もっと大きな声で呼んでみよ。彼は神なのだから。きっと何かに没頭しているか、席をはずしているか、旅に出ているのだろう。もしかすると、寝ているのかもしれないから、起こしたらよかるう。」:28 彼らはますます大きな声で呼ばわり、彼らのならわしに従って、剣や槍で血を流すまで自分たちの身を傷つけた。:29 このようにして、昼も過ぎ、ささげ物をささげる時まで騒ぎ立てたが、何の声もなく、答える者もなく、注意を払う者もなかった。」と書かれています。

そして、今度はエリヤの番です。18 : 30 から 「:30 エリヤが民全体に、「私のそばに近寄りなさい」と言ったので、民はみな彼に近寄った。それから、彼はこわれていた【主】の祭壇を建て直した。:31 エリヤは、【主】がかつて、「あなたの名はイスラエルとなる」と言われたヤコブの子らの部族の数にしたがって十二の石を取った。:32 その石で彼は【主】の名によって一つの祭壇を築き、その祭壇の回りに、ニセアの種を入れるほどのみぞを掘った。:33 ついで彼は、たきぎを並べ、一頭の雄牛を切り裂き、それをたきぎの上に載せ、:34 「四つのかめに水を満たし、この全焼のいけにえと、このたきぎの上に注げ」と命じた。ついで「それを二度せよ」と言ったので、彼らは二度そうした。そのうえに、彼は、「三度せよ」と言ったので、彼らは三度そうした。:35 水は祭壇の回りに流れ出した。彼はみぞにも水を満たした。:36 ささげ物をささげるころになると、預言者エリヤは進み出て言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、【主】よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなたのしもべであり、あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行ったということが、きょう、明らかにな

りますように。:37 私に答えてください。【主】よ。私に答えてください。この民が、あなたこそ、【主】よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださることを知るようになしてください。」:38 すると、【主】の火が降って来て、全焼のいけにえと、たきぎと、石と、ちりとを焼き尽くし、みぞの水もなめ尽くしてしまいました。:39 民はみな、これを見て、ひれ伏し、「【主】こそ神です。【主】こそ神です」と言った。」、つまり、聖書が教える神とは「答えることのできる神」です。ご自分が望むことはどんなことでもできる神、そのことを確かにもみことばは私たちに教えてくれるのです。

パウロは、あなたがたが救いに与る前に引かれて行ったところは、語ることのできない真の神ではないところだったと言います。確かに、私たちはそのようなところに通っていました。いろんな神と名の付くものが私たちの周りには存在しました。いろんなものに皆さんも手を合わせて来られたでしょう。でも、私たちが今気づくことは、彼らは私たちに答えることは出来ない。私たちの先祖にしても彼らは創造主ではありません。私たちが愛して尊敬を払う存在です。残念ながら、彼らがあなたの祈りに答えてくれると聖書は教えていません。今も生きておられる神だけがあなたの祈りを聞き、そして、主のみこころを為してくださるのです。

ですからパウロは、あなたがたはかつて神でないものところに引かれて行った。しかも、あなたがたは奴隷であったゆえに、有無を言わずにそこに引かれて行った。そのような者であったと話した上で、聖霊なる神がどういう働きを為してくれたのか、「救い」をあなたに与えてくれたと言います。

2. 救いに与る 3節

3節「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。…」、「教えておきます」とは「知らせる」という意味をもったことばです。「このことをあなたがたに知らせる、このことはあなたがたが知るべきである」と言うのです。パウロがこの後教えることは、主についての告白がその人がほんとうに救われているかどうかを明らかにするということです。

1) 聖霊が与えないことば : 「イエスはのろわれよ」

パウロは最初に、聖霊がもたらさない告白について言います。「神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ」と言わず、」と書かれています。この「のろわれよ」というのは「のろわれた人である」ということです。ですから、「イエスはのろわれよ」というのはイエスが神、また、救い主、そして、主であるという真理を否定するだけでなく、主が神ののろいに値するほど汚れた存在だということの意味しているのです。イエスは神ののろいに値するような罪に汚れたものだということ言うのです。

確かに、旧約聖書を知っている人がイエスの十字架を見てそのように思っても不思議ではないからです。なぜなら、申命記21:33に「その死体を次の日まで木に残しておいてはならない。その日のうちに必ず埋葬しなければならぬ。木につるされた者は、神にのろわれた者だからである。あなたの神、【主】が相続地としてあなたに与えようとしておられる地を汚してはならない。」とあるからです。それをパウロはガラテヤ3:13に引用するのです。「キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちに律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてののろわれたものである」と書いてあるからです。」と。

ですから、十字架に架けられた者たちは、先に話したように、神の前に大変大きな罪を犯し神によってのろわれるような者だと、そのことを意味しているのです。そのような罪を犯した者が十字架に架かったからです。ですから、イエスの十字架を見た人は思ったかもしれません。神によってのろいを受けるのにふさわしい罪人であったと。なぜなら、彼は分かっていたのです。イエスの十字架はイエスが何かをしでかしたその罪が原因ではなかったこと、彼の十字架は私たちの罪の身代わりであったことを彼らは知らなかったのです。ですから、その人たちにすればイエスの十字架を見てそのように思っても不思議ではありません。

しかし、どうして時代や地域を越えて、私たちが罪から救うために人となり身代わりに罪のさばきを受けてくださった主イエスを、のろわれるべき存在だと言って神を侮辱することができるのでしょうか？なぜ、そんな人がこの世界に溢れているのでしょうか？どの時代を見ても社会はそのような人たちで溢れていました。どうして唯一の救い主を憎むのか、どうしてこの主の悪口を言うのか？不思議に思いませんか？皆さん。今、あなたは救いに与っている。そして、このすばらしい救い主のことを話そうとしても人々はそれに関心を払いません。こんな罪を赦してくださるお方がいるにも関わらず、私たちの希望である唯一のお方がいてくださり罪を赦してくださるという、そのメッセージを感動をもってあなたが語っても、聞いた人たちはあなたの感動を共有しません。なぜでしょう？なぜ、この人たちは分からないのか？なぜ、この主を崇めることをしないのか？それは人間というのは生まれながらに神を憎む者だからです。生まれながらに人間は神を信じたくないのです。それが人間の問題なのです。そして、それは私たちに共通していることです。

ヨハネ3:19、20「:19 …光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。…」、この「光」と

は神、救い主のことです。イエスが地上に来ておられるのに、人々はイエスよりも「やみ」、罪を愛したと。「…その行いが悪かったからである。：20 悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。」と。悪いことをする者は光を憎んでいます。それが救われる前の私たちの姿です。また、ローマ1：28にも「また、彼らが神を知ろうとしがらないので、…」とあります。神がいることを知っていながら人々はこの神を信じようとしないのです。この神がいったいだれであるかを探ろうとしないのです。その結果どうなるのか？「…神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。」と。どんなことを？30節「そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、」と書かれています。

ですから、人間は神がいることを知っていながら、その神を信じたくないのです。どちらかという、自分たちに都合のいい神々を探して、また、作り出して、そういうものを信じて気休めとしているのです。パウロは「イエスはのろわれよ、のろいに値する存在である」と言う人たちは、間違いなく、そのうちに聖霊なる神が宿っていないからだと言います。つまり、救われていないからだと言うのです。

ですから、パウロは「神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ」と言わず、」と言います。見ていただきたいのは「だれも、…と言わず、」というところです。つまり、救われた人はだれひとりとして「イエスはのろわれよ」と告白することは絶対でない、だから、「だれも、」と書いているのです。例外はないのです。救いに与っているなら、聖霊なる神をいただいているなら絶対に「この方は汚れた方であり、この方は神ののろいを受けるにふさわしい方だ」と、そのように告白する者はひとりもいないということです。もし、そのように告白するなら、それはその人のうちに聖霊なる神がいないからだと言うのです。

2) 聖霊が与えることば : 「イエスは主です」

では、聖霊なる神はどのような告白を導くのでしょうか？このように続きます。3節の後半「また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません。」と。聖霊が与えることばは「イエスは主です」という告白です。注意して見てください。この「聖霊によるのでなければ、」という「～でなければ」とは「～を除いては、～以外には」ということです。つまり、「イエスは主です」という告白は聖霊を除いては、聖霊の働きを無くしては絶対に無理であるということです。聖霊だけがそのような告白へと導くのだと言います。聖霊だけが為せるわざであると、そのことを教えるのです。

もう一つ見ていただきたいのは「…できません」ということばです。これは「可能です」という意味です。だから、「イエスは主です」と言うことができるのは、聖霊なる神の御力によってのみ可能だということです。ですから、聖霊が働いてくださり、聖霊のみわざがなければだれも「イエスは主です」と告白することはできないと、パウロはここで繰り返して読者たちに教えるのです。ここにも「だれも、」ということばが出て来ます。聖霊なる神をいただいている人はだれも例外なく、「イエスはのろわれよ」と言わないし、だれもが「イエスは主です」と告白するとパウロは教えるのです。

・「聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません。」

イエスを信じている者たちは「イエスは私の主です」と告白するということは皆さんもうご存じです。私たちが何度も学んだローマ10：9に「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。」と書かれています。皆さんお分かりのように、このように口で告白することと何かの行いをすることによって救いに与ることはありません。この箇所ではパウロが言っていることは、あなたが信じて救いに与ったなら、あなたは黙っていることはできない、自然に「イエスは私の主です」という告白を為すということです。同じことをパウロはここで教えているのです。

実は聖霊によってこのような告白をするということは新約の中だけに出て来るものではありません。実は、旧約にもそのようなことが書かれています。マタイの福音書の中にイエスがこんなことを話されています。マタイ22：43「イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは、御霊によって、彼を主と呼び、」と、「彼」とは「約束の救世主」のことです。ですから、45節には「ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうして彼はダビデの子なのでしょう。」と、ダビデは約束の救世主を自分の「主」と呼んだのです。どうしてこのような告白が為されたのか？43節を見てください。「…御霊によって」と書かれています。つまり、聖霊なる神に支配されたダビデは、約束の救世主を「私の主」と呼んだということです。聖霊なる神はこのような働きを為さるということです。旧約においても為さったし新約の時代に生きる者にも同じことを神は為さるのです。

ですから、パウロはこの12章の初めで、聖霊なる神の働きとして「救いから全く離れていたあなたをこの救いへと導いてくださり、そして、救いに与ったあなたは『イエスは私の主だ』と告白する者へと生まれ変わった」ということを言うのです。

確かに、3節の初めでは聖霊のこと「神の御霊」と呼んで後半には「聖霊」と呼んでいます。このよう

に使い分けています。恐らく、「御霊」ということばは聖書の中には6箇所に出ています。ここには悪霊という意味で使われているところがあります。もちろん、そこには「悪」という形容詞が付けられていて、この「霊」は「悪霊」であることを示して間違わないように使われています。ですから、パウロはここでこのメッセージの出所が神だということを明らかにするために「神の」ということばを付けているのです。こうしてこのメッセージの信憑性を明らかにしたのです。これは「神のメッセージ」、「神の御霊が伝えてくれた真理」なのだ、そのことをこの中で強調しているのだと思います。

さて、次に進む前に考えてみたいのは「イエスは主です」という告白についてです。「主」ということばは皆さんご存じのように「神、キリスト」に対する称号です。実は、これも私たちは8:6ですで見ました。「私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在するのです。」と。

この「主」というお方は、ご自分がお造りになったすべての自然界、また、人類の上にご自身の完全な権利を行使なさるお方、つまり、この方は被造物である私たちにどんなことでも命じることができるその権利を持っているということです。なぜなら、この方によってすべては造られたからです。ですから、「主」と言うとき、そのお方はそのような存在だということです。この方はどんなことでもご自分の意志に沿ってみこころを為すことができるのです。その権利を持っている唯一のお方であると。

同時に、この「主」ということばは、特に、その当時のローマ皇帝の正式の称号でもあったのです。ですから、その当時の人々には「ローマ皇帝は主です」という告白が迫られていました。

では、私たちが「イエスは主です」と告白するときにそれはどういうことを意味しているのでしょうか？バークレーはこんな説明をしています。「人が『イエスは主である』と言うとき、それは、彼が自己の生における最高の忠誠と、自己の心の最高の畏敬とを、イエスにささげていることを意味する。」と。私たちが「イエスは主です」と言った時に、私はこの地上にあって生かされている間、この方に忠誠を誓っている、この方は私の主であって私はこの方の奴隷であってこの方に従っていくと言っているのです。「私の主」と告白するときに、それは心の最高の畏敬の念を表すものだということです。このお方は神なのです。この方はすべての創造主であられる方です。

ですから、私たちが「主」ということばを口にするときは、そのことをよく覚えることです。私はこの方を「主」を呼んでいる以上、本当にこの方に忠実に生きているのかどうかです。この方にふさわしい畏敬の念を私は現わしているのかどうか、本当に主を心から敬っているのか、畏れているのか？です。確かに皆さん、救いに与っていない人たちでも口ではイエスを「主」と呼ぶことはできます。そういう人たちがいたことが聖書の中に書かれています。イエスは マタイ7:21でこのように言われました。「:21 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、」と、なぜ、こんなことを言われたのか？多くの人たちがイエスに向かって「主」と呼んでいたからです。そのように口では言っていたからです。ですから、こう続くのです。「天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」と、違いがお分かりですね。口で「イエスは主です」と言っても、その人が主のみこころに無関心であり従おうとしていないなら、あなたは天の御国に入ることは疑わしいと言うのです。

今、私たちが見て来たのは「聖霊なる神の働き」です。聖霊なる神は私たち罪人のうちに働いてくださって、そして、私たちを新しく生まれ変わらせてくださり、新しく生まれ変わった者たちはうわべだけでなく、心から「イエスは私の主なのです」とそのように告白するのです。聖霊なる神が私たちのうちにみわざを為しておられるなら、私たちはただ告白するだけでない、この主のみこころに従って生きたいという思いを持って生きていこうとします。確かに、失敗の連続であったとしても、私は神に喜ばれるように生きていきたいと、そのように歩もうとするのです。

ですから、本当に聖霊なる神がその人のうちにいるのかどうかは、その人が何を言うかではなくて、その人がどのように生きているかによって明らかになるのです。神のみこころに従順なのかどうか、主のみこころに服従しようとしているのかどうか、喜んで主に犠牲を払おうとしているのかどうかです。イエスはルカ6:46でこのように言っておられます。「なぜ、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。」と、同じことを言われるのです。あなたは口でわたしを「主よ、主よ」呼んでいながら、なぜ、わたしの言うことを行わないのかと。人間的に言うなら矛盾しているのです。「主よ、主よ」と呼んでいながら神の言われることに従って行こうとしていない。もし、神がその人のうちに働いているなら、そんなことは起こり得ないのです。でも、あなたがただそのように思い込んでいるだけなら、それは可能でしょう。「主よ、主よ」と言いながら、主のみこころに従うのではなくて自分の思いどおりに生きていこうとしているのです。

パウロはこの3節で「イエスは私の主です」という告白は確かに聖霊なる神のみわざである。そして、心からその告白をする者たちは確かに救いに与っている者たちである、その証拠だと教えるのです。こ

うしてまず、「聖霊なる神の働き」、「救い」ということを話した後、パウロは今度は「御霊の賜物、霊的賜物」について話しを進めていきます。

B. 霊的賜物を与える 4-11節

4節「さて、賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。」、「賜物」とは「神によって、イエスを信じるクリスチャンに与えられたギフトのこと」です。ですから、持って生まれた才能ではありません。これはイエスを信じたときに神があなたに贈り物、ギフトとして与えてくださるものです。そして、すべての信仰者に賜物は与えられています。もう一つ付け加えるなら、その与えられている賜物というのは複数です。このように言います。「賜物にはいろいろな種類があります」と。正確に言うと、あなたに与えられているその賜物というのはあなたにだけ与えられているものであって、同じ賜物を同じ量だけ与えられている人はあなた以外に世界中に一人もいないということです。もちろん、同じ賜物が与えられているとしても、それぞれの分量が違うのです。それは何を意味しているのか？「あなたは特別な存在だ」ということです。救いに与ったときに神はあなたに一方的なギフトとして賜物を与えてくださったのです。私たちがよくやってしまうこと、また、このコリント教会でも為されていた大きな間違いというのは、その賜物の中にランキングを付けようとするということです。どの賜物が重要でどの賜物がそうでないのか…。コリント教会の中ではそういうことが為されていたのです。「あのような賜物はいいな…、それに比べて私の賜物は何なんだ…」と、そのように賜物を比較するような人たちがいたのです。それによって自分の価値を判断する人がいたのです。

1. 賜物の目的 4-7節

1) 賜物 4節

そこでパウロは言います。4節「さて、賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。」と。つまり、あなたに与えられたその霊的賜物、それは「御霊、つまり、聖霊なる神がご自分の意志をもって、完全なみこころによって与えてくださったもの」です。だから、あの賜物がないからと言って神に不満を言うのではないのです。あなたには神のみこころに基づいて最高の賜物を与えられているのだと言うのです。そのことを覚えてください。私たちはこの地上にいてだれかと比較するために生きているわけではありません。そう考えときに、私たちの社会は悪によって支配されているために、生まれてから私たちは競争の中で生きているのです。どっちが偉い？どっちが成功した？とか。信仰はそうではありません。神はあなたを特別に扱ってくださっているのです。なぜなら、イエスはあなたのために死んでくださった。神はあなたを選んであなたに救いをくださった。特別でしょう！それで終わったのではない、神はあなたに特別な賜物をくださったのです。それはあなたが特別だからです。

2) 奉仕 5節

次に出て来るのは5節「奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。」と、なぜ、「奉仕」ということばが出て来るのか？与えられた賜物を何のために用いるのかです。つまり、与えられた賜物は奉仕のために用いなさいと言っているのです。言い方を変えるなら、あなたに与えられた賜物を用いて、人々の益のために尽くしていきなさいということです。「私にはこんな賜物を与えられていますが、あなたはどんな賜物？」と、そのように比較をするのではないということです。賜物は自分のために与えられているわけではありません。賜物は周りの兄弟姉妹たちの益となるために与えられているのです。

ということは、あなたにはその賜物を用いるという責任があることに気付かれますか、皆さん？考えてください。神は特別にあなたに賜物をくださった。そして、その賜物を用いて「人々の益としなさい」と言われた。ということは、神はあなたがその賜物を用いて人々に仕えることを望んでおられることは言うまでもありません。ですから、信仰者の多くの人々がもし「いや、私は主に仕えることはできません。神がくださった賜物を使って神に仕えることはできません。」とそのように言うなら、それは大きな間違いです。それを判断するのは神ご自身です。少なくとも、私たちが覚えなければいけないことは、救いに与ったときに神は私に霊的賜物をくださった。この賜物は人々の益のために用いるのだ、奉仕のためなのだということです。私たちはみな奉仕者なのです。みなが同じことをするではありません。いろいろな働きがあるということです。

3) 働き 6節

三つ目にはこのように続きます。6節「働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。」と。この4、5、6節は同じ書き方をしています。「…いろいろの種類がありますが、…御霊は同じ御霊です。…主は同じ主です。…同じ神です。」と。働きを見て、一生懸命働いているとか、大きな働きをしているのかどうか、そんなことを比較するのではなく、あなたがすることはあなたに与えられた賜物を人々のために用いること、そこにフォーカスを当てなさいということです。なぜなら、主があなたに賜物をくださり、そして、あなたがそれを用いるように望んでおられるからです。

三つ目の「働き」、このことばは「活動」という意味をもったことばです。ですから、神が与えてく

ださった賜物を用いて人々に仕えるに当たって、神はそのために力、その活動の力を与えてくれるということです。ということは、このように言えます。ここにおられるすべての皆さん、ライブ放送を聴いておられる皆さん、あなたは年齢や健康状態に全く関係なく、あなたが生かされている以上、教会において神はあなたを使ってくださいということです。あなたは神のお役に立てるということです。

また同時に、兄弟姉妹の信仰の成長に役立つことができるということです。あなたは神の栄光を現わすことができるということです。そのことがここに書かれてあるのです。賜物が与えられ、それを人々のために使い仕えなさい、そして、それを為すために神は力をくださると…。私たちもいろんな働きを見て、そこにランキングをつけること、「あのような働きがいい、この働きは嫌だ」とか…。同じことを繰り返しています。パウロは、神はすべての人の中ですべての働きを為さる同じ神ですと。あなたがすることは周りと比較することではない、あなたに与えられたことを正しい目的のために、備えられた神の力をいただきながら為していきなさいと、そのことを繰り返して教えるのです。

*その目的 7節

そして、こう続きます。7節「しかし、みな^の益となるために、おのおのに御霊の現れが与えられているのです。」と。神の恵みによって救いに与ったあなたに神は霊的な賜物を与えてくださった。そして、あなたはそれを人々のために用いるように、それを用いて奉仕しなさいと、そして、そのために必要な力を神は与えてくれると、パウロはこのように教えたのです。

最後に覚えていただきたいのは、この4、5、6節を見た時に「御霊」があって「主」があって、そして、「神」と記されています。これが私たちの神、三位一体の神があなたに教えている真理です。あなたをお造りなされた神がこのことをあなたに教え、このことをあなたに望むのです。

1) みな^の益となる

だから、パウロはこれらのすべてのことは「みな^の益となるため」だと言います。先ほども見たように、あなたは神の役にも立つし、周りの信仰者の成長に役立つのです。「私にはそんなことはできない」ともし思っているなら、その問題はあなたのプライドです。私たちの信仰というのは、神の言われることを信じてそのように生きていこうとするわけです。そのためには、あなたの考えとか経験は捨ててしまうことです。神は「このようにあなたを使う」と言ってくださっているのです。使っていただくことです、皆さん！このようにして生きる信仰生活だけが神の前に価値ある生き方なのです。「みな^の益となる」と。

2) 聖霊が明らかにされる

「…おのおのに御霊の現れが与えられているのです。」、「御霊の現れ」とは「聖霊なる神が人々の前で明らかにされる」ということです。ですから、パウロはここで、あなたは神からすばらしい賜物をいただいた、そして、あなたは神が言われたようにその賜物を人々のために使おうとして人々に仕えていく、こうして私たちが集まったときにその中であなたは喜んで自分から奉仕をしていく、しかも、神の備えてくれる力によって…。あなたがそのように実践すれば、あなたのうちにおられる聖霊があなたを通して明らかにされていくということを言ったのです。人々はあなたのうちにおられる神を見るということです。そのようにして私たちは生きるのです。私たちが人々から誉められるためではなく、私たちのうちにおられる神が誉められるためです。私たちのすばらしさを人々に示すのではない、私たちのうちにいてくださる神のすばらしさを示すためです。

そのためにはどうすればいいのか？働くことです。人々の成長のために生きることです。救いに与ったことで満足するのではありません。主のみこころはここに【聖書】に書かれてあるのです。あなたには神が賜物をくださった。特別な賜物をあなたは神からいただいたのです。それを用いて人々に仕えなさいと言われるのです。この教会の中であって、だれかが何かを言ってくれないと奉仕ができないのではありません。「主よ、どうか私を用いてください」とあなたが祈っているなら神はきっとあなたに重荷をくださるでしょう。実際にそうして働いてくださっている方が一杯いるのです。教会の美化のために、美しさを保つために暑中自ら進んで労してくださっている兄弟姉妹たちがいるのです。だれかから強制的に言われてではない、自分から進んでしておられるのです。主によって示された人に対して進んで連絡を取り励ましている兄弟姉妹たちがいるのです。そんな連絡をいただくのです。「だれだれさんから連絡をいただいて励まされました」と。教会に来られない人たちに週報等を送る時にメモを添えて励ましを与えている兄弟姉妹たちがいるのです。熱心に兄弟姉妹のためにとりなしをしている兄弟姉妹たちがいるのです。快適な環境で主を礼拝するために労してくださっている兄弟姉妹たちが沢山います。そういう人たちが感謝なことに私たちの群れに与えられています。この人たちはだれにもその働きを見られないかもしれない。でも、彼らの働きは内住する神のすばらしさを世に証する働きをしているのです。

皆さん、神に用いていただけるということは感謝なことではないですか！最初にも言いましたが、神

が「これまで、もうそれで十分！」と言われるとき、それは私たちが天に召されるときです。そのときまで私たちは主が与えてくださった賜物を用いて仕えて行くのです。そのような信仰者に私たち一人ひとりが変えられることです。なぜそれが大切か？あなたがみことばが教えることを実践することによって、最初に話した通り、あなたの信仰が成長するからです。あなたがよりイエスに似た者へと変えられていくからです。そして、そういう人々が増やされることによって、群れ全体が変えられていくのです。

願わくは、皆さん一人ひとりが「主よ、あなたが教えてくださったことが私の実になりますように。あなたがくださった賜物をしっかり用いて、自分のためではない、人々のために生きることができるように私を使ってください。」となることです。過去を振り返るのではなく、残されたこれからの時間をそのように生きていくことです。願わくは、主が私たち一人ひとりを使ってください、私たちのうちにおられる神のすばらしさが世に証され続けること、主のみこころが成されることを私たちは期待して、この一週間も歩んでいくことができればと思います。